

宝彩有菜の

バガヴァッド・ギーター

第4回「最初に理解すべきこととは？」

text: 宝彩有菜

前回は、修行に入るためには、どのような要件が必要かということをお話ししました。さて、今回はバガヴァッド・ギーター第三章の解説ですが、今回から瞑想の各論に入っていきます。

その最初として、瞑想の修行とはいったい何をどうしようとしているのかを理解しておいた方がよいので、バガヴァッド・ギーターも、まず、その基本的な理解を求めています。

クリシュナは、アルジュナに「勇敢に戦え」と繰り返し励ましていますが、いったい何とどう戦うのか、どんな戦場なのか、真の敵は何なのか、戦う前に、それらを確認しておこうというわけです。欲を捨てなさいとか、執着を手放しなさいとか言いますが、では、その欲とか執着とかを起しているものは何なのか？ それを見定めてそれと戦えとクリシュナは、言っているわけです。

アルジュナは考えます。欲とか執着とかを起しているものは何なのか？ それは、ずっと元を辿って行けば、生きようとする欲、すなわち、生命欲。それがあらゆる行動を起している大元なのでしょう。クリシュナは、それと戦って、それを滅ぼせとっているのでしょうか？

確かにそれを滅ぼしてしまったら、諸欲も起きないでしょうし、諸行動も起きないでしょう。でも、もし、そのようにできたとしても、つまり、生命欲をすっかり叩きのめして、全く無くしてしまったら、すなわち、自分自身も死ぬことになるのではないかと、それはおかしいのではないかと、アルジュナがクリシュナに聞きます。

生きようとする欲、すなわち、生命欲があらゆる行動等の大元ですから、それを滅ぼしてはいけません。確かにアルジュナのいうとおりのように思えます。

それを聞いて、クリシュナは、

「それはそうだ。アルジュナの言うことは正しい。確かに、生命欲まで動かないようにする、あるいは、それを無くしてしまえば、自分自身が死んでしまう。そのとおりだ。悟りは、決して死ぬことではない。その逆だ。悟りは、より良く生きることだ。修行して元気が無くなったり、ましてや病気になるようでは、それは修行ではない。それは何か別の強欲だ。悟りに向かう道は、より良く生きる道だ」といいます。

さらに、生きている限り、生きようとする限り「好むと好まざるに関わらず、人は、ただの一瞬といえども、生命欲を元にした働きで活動せざるにはいられないのだ。無活動にはなれないのだ」(3-5)と言います。

ここでクリシュナの言う活動とは、手足を動かす行動だけでなく、心臓が動いたり、消化器官が動いたりすること、あるいは、物を見たり聞いたりすること、さらには、ものを判断したり推量したりして考えることなど、心身の活動がすべて含まれています。

一言で言えば、生きている限り、生命を根源とする諸活動は必ず起こっているということです。そして止めることもできない。

そして、クリシュナは、

「これらの諸活動を全て捨てて、何もしなければ、悟れるわけではない。また、これらの諸活動をなるべく少なくすることによって悟りに近づけるものでもない」(3-4)と
と言います。

そうではなくて、生命が一番大切であるし、それに基づく行動、諸活動も同じく大切だということを説明します。

そして、言葉を変えてアルジュナにさらに説明します。

「いいかい、アルジュナ、もともと創造主は、生き物を造ったときに、『汝ら、与えられた命を大切に、しっかり活動しなさい。それが汝らの義務だ。そして、しっかり活動したものは、みな幸せになれる』と言ったのだ」と。

つまり、修行の目指す方向とは、生命を根源とする諸活動をしっかりやりなさいという方向だということわけです。決して無活動になるのではないということです。行動しなさい。生きなさいです。命の限り生きなさいということです。

そういわれてアルジュナは、

「でも、クリシュナ先生、それでは、生まれてこの方いつもやってる今までのやりかたと同じです。そして、そのやり方だと、欲求不満になったり、怒りが爆発したり、落胆したり、心配でいても立ってもいられなくなったりしてしまいます。とても、幸せにはなれません。いったいどうすればいいのですか？」

敵と戦えと言われて、いざ戦おうとしたら、その敵と戦ってはいけないとクリシュナにいわれ、アルジュナは、「では、いったい、どうしろと言うんですか」とクリシュナに聞きます。

するとクリシュナは、

「生命欲は当然の欲で、神様が授けてくれたものだが、そこから、諸活動に至るまでの間に、実は多くの欲(諸欲)が介在しているから、おかしなことになるのだ」

と言います。問題はそこにあると言います。

「生命欲」というと、欲のひとつのようですから、「生命」「存在」「本当の自分」とかに言い方を変えましょう。「魂」と言ってもいいですが、バガヴァッド・ギターでは、このことを「アートマン(真我)」と言っています。

つまり、創造主は、「アートマン(真我)」を作って、「私のいう通りに、活動すれば、幸せになるよ」と言ったということになります。しかし、言う通りに活動しないから、幸せになれないという現状になっているわけです。

するとアルジュナは聞きます。

「クリシュナ先生、では、なぜ、人は神様に言われた通りに素直に活動できないのですか。つまり、アートマンから直接活動に向かっているってことですよね。でも、それはなぜですか」(3-36)

それに対して、クリシュナは答えます。

「いいかい、アルジュナ。そのわけはだね。アートマンがさまざまな欲で覆い尽くされているからだ。

それはまるで、煙に巻かれた炎のように。

それはまるで、塵で曇ってしまった鏡のように

それはまるで、子宮に包まれた胎児のように。」(3-38)

そして、続けて、アルジュナに言います。

「このように、アートマン(真我)が諸欲という天敵に覆われているから、その欲望の火で、自分の心身を焼いてしまうのだ」(3-39)

と、ここで、初めて、悪いのは「諸活動」ではなく、「諸欲」だと言明します。

さてさて、やっと一歩前進しました。戦うべき敵の正体がやっと明らかになってきました。

当初、クリシュナは、結果を目的とした行動はいけないと言いました。だから、アルジュナは、「行動」が敵だと思いました。そして行動をやっつけるにはどうするかと聞いたら、行動を起こしているものを滅するのだと言われて、それは、魂だ。命だと思いました。でも、それと闘っては、自分の命が無くなると言ったら、今度は、当たり前だ、命は大切にせねばならん。敵は、命の上に乗って、覆いかぶさっている諸欲だというわけです。

戦う相手は、命=アートマン(真我)ではなく、それを覆っている諸欲なのだそうです。

「アートマン(真我)が本当の自分なのだが、それを覆っている諸欲の活動で、諸行動が起き、それらをアートマン(真我)は自分がそうしていると思ってしまうのだ」(3-27) ということです。

ですからその諸欲と戦えとクリシュナは言います。

「はい、クリシュナ先生、わかりました。では、その諸欲と戦うには、いったいどうすればいいのですか、
というか、それはいったい、そもそもどこにどのようにあるのですか？」

とアルジュナは聞きます。それはそうです。敵の居場所が分からなければ、戦いようがありません。

「どこにあるのか？ では言おう。いいかい、アルジュナ、良く聞きなさい。欲望は、眼、耳、鼻、舌、身の五感と、心と、知性を住処として正しい知識を覆い隠して自分を迷わせているのだ」(3-40) と言います。

「五感」と、「心」と、「知性」にそれぞれ欲望が潜んでいるということです。

他の訳では、「五感」と、「意識」と、「理性」になっています。

英訳では、(the senses), (the mind), (the intelligence) となっています。

つまり、「アートマン(真我)」を何重にも覆っている層があり、その層ごとに欲望が住み着いていると言っているわけです。

そして、

「まずは、第一に自らの五感を支配して、正しい認識と自由な考えを阻害している欲望を滅しつくせ」(3-41) と言います。

「正しい認識と自由な考えを阻害している欲望」、つまり、ひとことでいえば、「欲望」ですが、それが、まずは、五感にあると言っています。正確には、五感を支配して、欲望を滅しつくせということです。

そして、アートマンを覆っている順番を次に語ります。

「アートマンの上には、知性があり、知性の上には心があり、心の上には五感があり、その上に外界の対象がある」(3-42)